シェイクスピア Ⅲ

小津次郎
喜志哲雄
大場建治
武井ナヲエ　訳
大山俊一
菅　泰男
富原芳彰

世界古典文学全集

43

筑摩書房

シェイクスピア Ⅲ　　世界古典文学全集　第43巻

昭和41年11月30日発行

訳者代表　大山俊一

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2—8
振替東京 4123 電話（291）7651

目次

ヘンリー六世　第一部　小津次郎・喜志哲雄訳　5
ヘンリー六世　第二部　小津次郎・大場建治訳　65
ヘンリー六世　第三部　小津次郎・武井ナヲエ訳　135
リチャード三世　大山俊一訳　201
リチャード二世　菅泰男訳　285
タイタス・アンドロニカス　富原芳彰訳　349
解説　大山俊一　413

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

シェイクスピア　Ⅲ

ヘンリー六世　第一部

登場人物

ヘンリー六世
グロスター公爵　国王の叔父、摂政。
ベッドフォード公爵　国王の叔父、フランスの摂政。
エクセター公爵　国王の大叔父。
ウィンチェスターの司教　国王の大叔父、のちに枢機卿となる。
サマセット公爵
リチャード・プランタジネット　のちにヨーク公爵となる。
ウォリック伯爵
ソールズベリー伯爵
サフォーク伯爵
トールボット卿　のちにシュルーズベリー伯爵となる。
ジョン・トールボット　彼の息子。
エドマンド・モーティマー　マーチ伯爵。
ジョン・フォールスタッフ　サーの称号を持つ。
ウィリアム・ルーシー　サーの称号を持つ。
ウィリアム・グランズデイル　サーの称号を持つ。
トマス・ガーグレイヴ　サーの称号を持つ。
ロンドン市長
ウッドヴィル　ロンドン塔の管理者。
ヴァーノン　白薔薇（ヨーク）がた。
バセット　紅薔薇（ランカスター）がた。
弁護士
モーティマーに付き添う看守たち
法王の使節
大使二人
シャルル　フランス皇太子、のちにフランス王となる。
レニエ　アンジュー公爵、ナポリ王の称号を持つ。
バーガンディー公爵
アランソン公爵
オルレアンの庶子
パリ市長
オルレアンの砲台監守
彼の息子
ボルドーのフランス軍の指揮官
フランス軍下士官
門番
老羊飼　ジャンヌ・ダルクの父。
マーガレット　レニエの娘、のちにヘンリー六世と結婚する。
オーヴェルニュ伯爵夫人
少女ジャンヌ　ジャンヌ・ダルクと呼ばれる。
貴族たち、ロンドン塔の看守たち、葬列の先導役たち、役人たち、兵士たち、使者たち、従者たち。
少女ジャンヌに現われる悪霊たち。

場所

イングランド及びフランス。

第一幕

第一場　ウェストミンスター寺院。

葬送曲がひびく。ヘンリー五世の葬列登場。従うのは、フランスの摂政ベッドフォード公爵、摂政グロスター公爵、エクセター公爵、ウォリック伯爵、ウィンチェスターの司教、そしてサマセット公爵。

ベッドフォード　天には黒雲がたれこめ[1]、真昼も夜となれ！
時世の転変をもたらす彗星は、
輝く光の髪を空中にひらめかせ
そのきらめきは、ヘンリーの死をはかった
大逆非道の星をいましめるのだ――
ああ、ヘンリー五世王、あの高名がこの世にながらえるはずもなかった。
イングランドがこれほどの王を失ったことはかつてない。
グロスター　イングランドに初めて現われたまことの王、それがヘンリーだった。
先王こそは、王者にふさわしい力の持ち主、
ひらめく剣の光は見る者の目をくらませ、
腕をひろげれば竜の翼にもまさり、
怒りの火を燃え立たせた両眼が敵を射すくめれば、
敵は、顔に烈しく照りつける白昼の太陽よりも目に痛いと、
這々の態で退散したものだった。
いや、とても言いつくせぬ。あの偉業はどんな言葉でも表わせない。
ヘンリー王は手を挙げれば、征服をせずにはおかなかったのだ。
エクセター　死を悼むには、この喪服の黒より、戦の血の色こそふさわしいではないか。
ヘンリーは死んだ、二度とこの世に現われはしない。
こうして我々は物言わぬ木の柩にかしずき、
不名誉極まる死の勝利を、
ものものしく居並んでたたえているが、
これではまるで凱旋する戦車につながれた捕虜同然だ。
いったい、我々は、非運をもたらす星が
こうして我らの栄光を倒したのを呪おうというのか。
それとも、奸智にたけたフランス人が
いわば悪魔を頼む魔術師のたぐいで、ヘンリーこわさに、
魔法の文句を使ってその死をたくらんだとでも考えようというのか。
ウィンチェスター　ヘンリー王は、王の王なる主の祝福を受けた人だった。
フランス人どもには、かの怖ろしい最後の審判の日といえども、
ヘンリーの姿の怖ろしさにはまさることもあるまい。
ヘンリーの戦こそは、万軍の主の戦を地上で行なったもの。
教会の祈りがあればこそ、あれほどの勝利が生れたのだ。
グロスター　教会だと！　どこにあるのだ、それが。坊主どもに祈り殺されたりしていなければ、
王の生命の糸がこれほど早く切れることもなかったはずだ。
あなたがたのお気に召すのは、女々しい王様だけさ、
それだとまるで小学生のようにおどしが利くというわけだからな。
ウィンチェスター　グロスター、我らの意向はどうあれ、あなたは摂政、
陛下もこの国も、意のままにしようという人だ。
あなたの奥方[2]は誇り高く、さすがのあなたも手も足も出ぬ、
あそこまでは、神にも、神に仕える僧侶にも、思いも寄らない。

グロスター　仔細らしい神がかりはやめてくれ、本当は肉体の喜びが好きなくせに。
一年を通じて、あなたが教会へ出かけるのは、
自分の敵の破滅を祈りに行くときだけではないか。
ベッドフォード　もういい、無益な争いはやめて、心を穏やかにしてもらいたい。
さあ、祭壇へ、皆さん。先導の者たちは行列を進めてくれ。
〔葬列退場〕
黄金のかわりに、我らの武器を祭壇にささげよう、
もはやこの武器も詮ないものなのだから。ヘンリーが死んだ以上、
これからはみじめな歳月しかやって来ない。
赤ん坊は母親の濡れた眼から流れる乳を吸い、
この国は、さながら塩からい涙で子供を育てる乳母となろう、
そしてこの世で死者を嘆くのはただ女ばかり。
ああ、ヘンリー五世王、あなたの魂に力があるなら、
どうかこの国に祝福を。内乱を食いとめ、
天なる非道の星の仕業を妨げてください。
あなたの魂が天に昇れば、
かのジュリアス・シーザーにもまさる明るい星となるはず。

使者登場。

使者　並みいるかたがたに御挨拶申し上げます。
悲しい報せをフランスから持って参りました、
敗北と殺戮とこの上ない屈伏の物語です。
ギエンヌにシャンパーニュ、ラーンス、ルーアン、オルレアン、
パリ、ジゾール、それにボワティエまで、ことごとく敵の手に落ちました。
ベッドフォード　何だと！　ヘンリーの棺の前だ、[3]
大声を出すな。さもないと、これほどの大敗の報せを聞けば、
亡きヘンリーの死体が鉛の棺を破り、この世に戻って来ないともかぎらぬ。
グロスター　パリが落ちたか。ルーアンも敵の手に？
たとえヘンリーがよみがえって来ても、
この報せを聞けばもう一度死んでしまうだろう。
エクセター　何ゆえの敗北だ。誰が裏切ったのだ。
使者　裏切りのせいではありません。ただ人員と資力が足りなかったためです。
兵士たちが秘かに言いかわすところによれば、
ここではお歴々がいくつもの党派に分れ、
作戦をたてて遂行して行くべきときに、
もっぱら大もとの議論に明け暮れしておられるとか。
あるかたは戦を引き延して出費を減らそうと言われますし、
あるかたは一足飛びの決戦を叫ばれるが、飛び立とうにも足がいうことをききません。
またあるかたは、一切の費用をかけることなく、
ただ巧みな弁舌に敵を乗せれば、和平が得られるとお考えの様子です。
どうか眼をおさましください、イングランドのお歴々。
いたずらに時を費して、手に入れたばかりの名誉を汚されぬよう。
イングランドの紋所に輝く百合の花[4]は切り取られております。

---

(1)　エリザベス朝の舞台の屋根の部分は「天」と呼ばれたが、悲劇を演じるときにはそこに黒布が張られた。それを雲に見たてている。
(2)　グロスターの二度目の夫人エリナー・コバム。この戯曲には現われないが、『ヘンリー六世』第二部に登場する。
(3)　葬列はすでに退場しているが、棺はまだ寺院の中にあると考えられるので、この台詞が出て来る。
(4)　エドワード三世以来のイングランドの王は、イングランドのライオンとフランスの百合とを、楯の紋につけていた。

栄えある紋をつけた楯のなかばがなくなっているのです。〔退場〕
エクセター　我らの涙の川が、たとえこの弔いにはせき止められていたとしても、
この報せを受ければ、白波を立てて流れるだろう。
ベッドフォード　何としても私にはすてておけぬ報せだ。フランスの摂政だからな、私は。
鋼の鎧はどこだ。フランスを守って戦わねばならぬ。
こういう不面目な喪服など着てはいられぬ！
フランス人どもの痛手が、今はしばらくおさまっていても、
いずれは眼にもの見せて――いや負わせた傷に涙を流させてやるぞ。

さらに使者一人登場。

第二の使者　どうかこの手紙の束を御覧ください、悪い報せばかりです。
フランスは今や全くイングランドの手を離れ、
残るはそこここに取るに足りぬ小さな町のみ。
皇太子シャルルはラーンスで戴冠して王となり、
オルレアンの庶子[1]と兵力を合せております。
アンジュー公爵レニエが兵を集めるかと思うと、
アランソン公爵も馳せ参ずるといったありさまです。〔退場〕
エクセター　皇太子が王となった！　皆が馳せ集まるというのか！
ああ、この不面目を逃れようにも、我らには行く所がない。
グロスター　我らはただ敵ののど首めがけて進んで行くだけのこと。
ベッドフォード、あなたが気が染まぬなら、私がこの戦をやり抜こう。
ベッドフォード　グロスター、なぜ私の戦意を疑うのだ。
この胸の中では、私はすでに兵力をととのえ、
フランス軍を打ち破ったほどの思いでいるのだ。

第三の使者登場。

第三の使者　殿様がた、すでにお嘆きの種はあり余るばかり、
実は、使いの趣と申しますのは、怖ろしい戦のこと、
かの勇敢なトールボット卿とフランス軍との戦のことでございます。
ウィンチェスター　何！　トールボットの勝ち戦だと、そういうのだな。
第三の使者　いえ、滅相もない。トールボット卿の負け戦、
その次第はもっと詳しく申し上げましょう。
過ぐる八月十日のこと、フランスの畏怖的なるトールボット卿は、
オルレアンの囲みを解いて退かれましたが、
何しろ味方の軍勢は六千にも満たぬこととて、
二万三千のフランス軍に
すっかり包囲され、攻めかかって来られたのです。
味方の兵は隊列を立て直す暇もなく、
射手の前を守る槍にもこと欠くありさま。
かわりにまわりの垣から鋭い杭を引き抜き、
あたりかまわず地面に突き立てて
敵の騎馬武者がわって入るのを防ぎました。
三時間以上も戦は続きましたが、
勇猛のトールボットは、考えも及ばぬほど、
刀や槍をふるってのみごとな働きぶりでした。
その手にかかって数百人が地獄行き、とても立ち向える者はありません。
ここかしこ、至る所を、卿は怒りにかられて飛びまわります。
フランス軍は、悪魔が彼の武器に乗り移ったと叫び、
全軍はただ茫然として立ちつくすばかり。
部下の兵士たちは、主人のひるむことを知らぬ勇気を見て、
「トールボットだ、トールボットに続け！」と一斉に叫び、
戦闘のまっただ中にどっと進み入りました。
こうして味方の勝利は全く決したはずでしたが、
何とジョン・フォールスタッフ殿が卑怯の振舞い、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もともと、先頭の一軍のすぐあとから
従って行って、助太刀をするはずでありながら、
いざとなると、一太刀も交えず卑怯にも逃げ去りました。
これがきっかけで、味方はちりぢりとなり、殺される者数知れず。
すっかり敵に囲まれてしまったのです。
中に卑しいワルーン人[2]が一人、皇太子シャルルの恩賞にあずかろうと、
トールボットを背後から槍で刺しました。
フランス人が全軍の力を結集しても、
一度もまともに見ることさえできなかったあのトールボットを。
ベッドフォード　トールボットが死んだか。それなら私も死のう、
あれほどの立派な指揮官が、援軍の来ないばかりに、
卑劣な敵兵の手にかかったというのに、
私はここでいたずらに安逸を貪っていたのだからな。
第三の使者　いえ、トールボット卿は生きておられますが、捕われの身なのです。
スケイルズ卿にハンガーフォード卿も同じ身の上です。
ほかのかたもおおかたは殺されたり捕われたりしています。
ベッドフォード　トールボットを取り戻すためなら、どんなことでもやろう。
よし、シャルルのやつを王座からまっさかさまに地獄へつき落してやるぞ。
あいつの王冠が我らの友人トールボットの身代金だ。
こちらの貴族一人とフランスの貴族四人を交換してもいい。
さあ、失礼する、皆さん。私には仕事がある。
すぐにもフランスへ出かけて行ってかがり火を焚き、
我らの聖ジョージの祭[3]を盛大に祝わねばならない。
率いて行く兵士の数は一万、
血なまぐさい働きでヨーロッパじゅうを震え上らせようという連中だ。
第三の使者　それが何よりです。オルレアンを包囲する
イギリス軍はすっかり弱っております。
ソールズベリー伯爵は、援軍を待ちこがれながら、
部下の謀叛をかろうじて食い止めておられます。
何しろあの小人数で、あれだけの大軍を見張っているのですから。
〔退場〕
エクセター　皆さん、ヘンリー王に誓った言葉[4]を思い出されるがよい、
フランスの皇太子を叩きつぶすか、
それとも我らの支配に従わせるか、そうであったはずだ。
ベッドフォード　そのとおり、よく憶えている。さあ、それでは失礼して
仕度にかからねばならぬ。　〔退場〕
グロスター　私は急いでロンドン塔へ行き、
武器弾薬を調べようと思う。
それからだ、幼いヘンリーを王位につけるのは。[5]　〔退場〕
エクセター　私は幼い王のおられるエルタムへ――
私には特に王の保護が任されているからな。
王の身の安全のために、知恵を絞らねばならぬ。　〔退場〕
ウィンチェスター　一人残らず仕事があるというわけか。
おれ一人がのけ者、おれにだけはやることがない。
だがいつまでも無用の長物でいる気はないぞ。

---

(1) デュノワ伯爵ジャンのこと。オルレアン公爵の庶子でシャルルの従兄に当る。
(2) オランダとフランスの国境地方（現在のベルギー東南部あたり）の住民。
(3) 聖ジョージはイングランドの守護聖人。毎年四月二十三日に祭が行なわれた。
(4) ヘンリー五世の臨終のときに一同が誓ったことを指す。
(5) ロンドンの近郊。ここにある宮殿が、十三世紀から十六世紀までは王の居所であった。

おれの仕事は、王をひそかにエルタムから連れ出すこと、
そして自分が、この国の舵を取る身となることだ。〔退場〕

第二場　フランス。オルレアンの町の前。

ラッパの吹奏。シャルル、アランソン、レニエが、兵士たちを従え、太鼓の音に合せて行進しながら登場する。

シャルル　火星マルスの軌道が今に至るまで分らぬように、
その名をとった軍神の、この地上での動きも、まるで見当がつかぬ。
つい先頃まで、イングランド軍の上に照り輝いていたのに、
今では我らの上に微笑みかけ、勝利をもたらすという始末だ。
名のあるほどの町でわが軍の手に落ちていないものがあろうか。
こちらはこうして苦もなくオルレアンの間近にいるが、
飢えたイングランドの兵たちは、まるで蒼ざめた亡霊のように、
息もたえだえ、やっと月に一度ばかり我らに攻めかかって来るのだ。

アランソン　好物のポリッジや脂ぎった牛肉が足りないのです。
連中と来た日には、らば同様の食物にありつかせ、
餌を口にしばりつけてでもおかぬことには、
まるで溺れた鼠のようにみじめたらしくなるのです。

レニエ　囲みを破りましょう。こうしてぐずぐずしていることはありません。
以前こちらが怖がっていたトールボットは捕虜となり、
残るはただ気違いじみたソールズベリーだけ、
そのソールズベリーにしても、気疲れで戦意をなくしかねません――
何しろ戦(いくさ)をしようにも兵隊も金も揃わないのだから。

シャルル　よし、戦の合図を鳴らせ。一気に攻めかかろう。
さあ、命がけのフランス軍の名誉のためだ！
もし私が一歩でも退いたり逃げたりしたら、
私を殺してもかまうことはないぞ。〔一同退場〕

軍鼓が鳴る。フランス軍はイングランド軍に大敗する。シャルル、アランソン、レニエ登場。

シャルル　何というざまだ。いったい何者だ、おれの部下は！
犬め！　卑怯者！　腰抜け！　おれは逃げることなど思いもしなかったのに、
部下どもがおれ一人を敵のまん中に置去りにしたのだ。

レニエ　ソールズベリーというのは全く向う見ずな人殺しです。
あの戦いぶりはまるで生きているのをいやがっているようだ。
ほかの将軍たちも、腹をすかした獅子のように、
飢えた身の餌とばかりに、我らに攻めかかって来ます。

アランソン　わが国の歴史家フロワサール[1]によれば、
エドワード三世治下のイングランドには
オリヴェかローランにも紛う勇士が輩出したとありますが、
今のありさまを見ればなおのこと疑いはありません。
というのも、戦場に現われる兵士は、一人残らず
サムソンかゴリアテ[2]のような者ばかり。数はこちらが十倍！
向うは骨と皮ばかりになった連中です！　こんなやつらが
あれほど勇猛果敢に立ち向って来るなどと、誰が考えたでしょう。

シャルル　この町から出て行こう。何しろ向うは、気違い兎みたいに、
頭に来たやつらだ。
そのうえ、すきっ腹ときているから、ますます戦意をかき立てかねぬ。
昔から分っているのだ。囲みを解くくらいなら、
あのときすました歯で町の城壁を食い裂こうという連中なのだから。

レニエ　どうやら連中の武器は、何か不思議な仕掛けで、
いわば時計のごとく、たえず打ち続けるようにできているらしい。

そうとしか思われません、あれほどの抗戦ぶりは。
あんなものは、相手にしないにかぎります。
アランソン　全くです。

オルレアンの庶子登場。

庶子　皇太子殿下はどこだ。お伝えすることがある。
シャルル　オルレアンのデュノワ伯爵か、よく来られた。
庶子　どうやら沈んだ御様子、お顔色も冴えません。
先頃の敗北ゆえのお悩みなのでしょうか。
どうかもう御心配なく、助けがすぐそこに来ております。
実は、一人の聖なる乙女をここへ連れて参りました。
この乙女は、天からの啓示を受けて、
このいつまで続くとも知れぬ囲みを破り
イングランド軍をフランスの国境から追い出すべく、命じられております。
この女にはあらたかな予言の力がそなわり、
かのローマの九人の女予言者をしのぐばかり、
過ぎたこと、これから先のこと、すべて言い当てます。
殿下、女をここへ呼び入れましょうか。どうかお信じを、
予言は確かで狂いのないものなのですから。
シャルル　よし、呼びに行け。〔庶子退場〕だが、まず技を試すためだ、
レニエ、私の身代りとしてここに立っていてくれないか。
堂々と尋問を行ない、せいぜい怖い顔をして見せるのだ。
そうすれば、女の技のほども分ろうというものだ。

オルレアンの庶子、少女ジャンヌを連れて登場。

レニエ　おお、娘、お前か、途方もない技を見せようというのは。
少女　まあ、レニエ、あなたなの、私をたぶらかしたつもりでいるのは。
皇太子はどこ。さあ、うしろにいないで出て来てください。
お目にかかったことはありませんが、よく存じています。
いえ、驚かれることはありません、この目にはすべて見通しです。
二人だけでお話ししたいのです。
どうか皆さん、しばらく邪魔をしないでください。
レニエ　第一歩からみごとにのさばり出たな。
少女　殿下、私は羊飼の娘に生れ、
何の技も身につけてはおりません。
ただ、神様と慈悲深い聖母様が、
こんな賤しい身の上の私にも光を与えてくださったのです。
お聴きください、私がいとけない子羊の世話をしながら、
太陽の鋭い暖かさに頬をさらしていたとき、
聖母マリア様が姿をあらわされ、
神々しい様子でこうおっしゃったのです——
お前の賤しい仕事をすてて
祖国を禍いから救い出せ、と。
必ず助けてやろう、成功は疑いない、ともおっしゃいました。
そのときのお姿こそ、この上ない栄光に包まれたもの。
そして私まで、それまでは黒く日焼けしていたのに、
マリア様の澄んだ御光を全身に浴びると、
このとおり、美しい姿に生れ変ったのです。
さあ、何なりとお尋ねください。
たちどころにお答えしましょう。
もし元気がおありなら、手合せをして私の勇気をお試しくださっても
結構です。
そうすれば、私がただの女ではないことがお判りでしょう。

---

(1)　十四世紀フランスの年代記作者。次のオリヴェとローランは、どちらもシャルルマーニュ大王の部下の勇士である。
(2)　サムソンもゴリアテも、「旧約聖書」に現われる英雄。

嘘は申しません、私を戦の仲間に加えてくだされば、
必ず武運が開けるはずです。
シャルル　大変な剣幕だな、これには驚いたぞ。
ただお前の武勇の証拠が見たい、つまり、
一度わしと勝負をしてもらいたい。
お前が勝てば、今の言葉は本当だということになる、
お前が負ければ、仲間づき合いは一切お断わりだ。
少女　用意はできています。これが私のとぎすました剣、
両側はそれぞれ五輪の百合で飾ってあります。
これこそトゥレーヌは聖カトリーヌ教会で、
古い剣の山から選びとったものです。
シャルル　さあ、かかって来い。女など恐れはせぬぞ。
少女　私も、生命ある限り、男から逃げたりはしません。
〔二人戦い、少女ジャンヌが勝つ〕
シャルル　待った、勘弁してくれ。お前はまるでアマゾン女だ、
しかもデボラ[1]さながらに剣を振うのだから。
少女　聖母様がお助けくださるのです、私一人では思いもよりません。
シャルル　お前を助けるのが誰だろうと、わしを助けてくれるのはお前だ。
ぜひともそうしてほしい。
この心も腕も、一度にお前にまいってしまった。
すばらしい乙女、乙女というんだな、お前は、
わしはお前のしもべとなる、主君ではない、
いいか、フランスの皇太子がくどくのだぞ。
少女　色めいて言い寄られてもお受けはできません、
私の誓いは、神様によって清いものとされているのですから。
殿下の敵をすべて追い払ったうえで、
お気持に応えることを考えましょう。
シャルル　よかろう、だが、お前に打ちのめされたこのしもべに、つれなくするのではないぞ。
レニエ　殿下はずいぶん長話をしておられるな。
アランソン　きっと、腹の下まで打ち明けた話をしておられるのさ。
でなければ、あれほど話が長びくわけがない。
レニエ　お邪魔をするかな。これじゃいつ果てるともしれぬ。
アランソン　つもる思いがおありなのだろう、我ら下々には思いもかけぬほどさ。
この手の女は、舌先三寸でうまうまと人を乗せるものだ。
レニエ　殿下、どうなさいました。どういうおつもりです。
オルレアンを捨てますか、それとも守るとでも？
少女　守るのだとも。ほんとに疑い深い弱虫ばかりだ！
息の続くかぎり戦うのです。私がついています。
シャルル　この女の言うとおりだ。戦い抜くのだ。
少女　私はイングランドの悩みの種となるさだめです。
今夜必ず、囲みを破ってみせます。
寒さのあとの小春日和、嵐のあとの凪ぎが、きっと訪れるはず、
何しろこの私が、戦場へ出て来たのです。
栄光とはいわば水面の波紋のようなもので、
いつまでも拡がり続け、
ついに拡がりすぎて消えるまでは、とまらぬものなのです。
ヘンリーの死が、すなわちイングランドの波紋の終り、
かつての栄光は泡と消えました。
今の私は、シーザーとその運命を乗せて、
堂々と荒波を乗り越えて行った船[2]なのです。
シャルル　マホメットは鳩によって霊感を得たというが、
それなら、そなたの霊感の源は、聖ヨハネ[3]の使いの鷲だ。
コンスタンティヌス大王[4]の母なる聖ヘレナも、
聖ピリポの娘たちも、及びもつかぬ。
そなたはいわば、地上におり立った輝くヴィーナスの星、

どんなにあがめても足りそうもない。
アランソン　さあ、ぐずぐずせずに、囲みを破りましょう。
レニエ　娘、我らの名誉を守るためだ、何なりとやってくれ。
敵をオルレアンから追い払って、不滅の名を残すのだ。
シャルル　すぐにかかろう。さあ、出発だ。
この娘の言葉が嘘なら、今後どんな予言者も信じはしないぞ。
〔一同退場〕

第三場　ロンドン。ロンドン塔[5]の前。

グロスター公爵、青服を着た従者たちを連れて登場。

グロスター　今日こうしてロンドン塔を調べに来たが、
どうもヘンリーが死んでから、汚職が多いようだ。
看守どもはどこだ、なぜ我らを出迎えない。
門を開けろ、グロスターが来ているのだぞ。
第一の看守　〔中で〕誰だ、笠にかかって開けろというのは。
第一の従者　おそれ多くもグロスター公爵様だ。
第二の看守　〔中で〕誰だろうと、通すわけにはゆかぬ。
第一の従者　悪党め、それが摂政様に答える言葉か。
第一の看守　〔中で〕殺生な真似はおよしください。これが答えだ。
こちらは命令どおりに動くほかないのだ。
グロスター　命令だと、誰が、誰の命令が、おれの先を越すのだ。
この国の摂政はおれ一人ではないか。
門を叩き破れ、責任はおれが持つ。
こんな三下野郎に馬鹿にされてたまるか。
〔グロスターの部下たちは塔の門に突進する。
塔の管理者ウッドヴィルの声が中でする〕
ウッドヴィル　〔中で〕何の騒ぎだ。どこの裏切者が来たのだ。
グロスター　ウッドヴィル、その声はお前だな。
門を開け、グロスターが通ろうというのだ。
ウッドヴィル　〔中で〕御辛抱を、公爵様。開くわけにはまいりません。
ウィンチェスターの枢機卿様の御命令です。
あなた様もあなた様の手の者も、
断じて入れてはならぬと、堅く命じられております。
グロスター　腰抜けのウッドヴィルめ、あいつをおれよりも立てるのか。
ウィンチェスターも出過ぎたやつだ。あの坊主の傲慢ぶりは、
先王ヘンリーも、全く鼻持ちがならぬと言っておられた！
お前は、神にも国王にもそむくやつだ。
門を開けろ、開けぬとお前をしめだしてしまうぞ。
従者たち　門を開けろ、摂政様のお通りだ。
とっとと出て来ないと、叩き破るぞ。
門前の摂政のところへ、ウィンチェスターと黄褐色の服の彼の部下たちが登場して来る。
ウィンチェスター　どうした、野心家のハンフリー！　どうしたことだ。

---

(1)「旧約聖書」に現われる女予言者で、イスラエル人を解放した。『士師記』第四章を参照。
(2) 紀元前四八年、ジュリアス・シーザーが小舟で危険な航海をした故事に言及している。
(3) コンスタンティヌスはキリスト教の信仰を初めて公認したローマ皇帝。その母ヘレナは、霊感に導かれて、キリストがはりつけにされた十字架を発見したと伝えられる。
(4) 予言の力をもった四人の娘たち。「新約聖書」の『使徒行伝』第二一章第九節を参照。
(5) テムズ川に面した城で、元来は宮殿であったが、このころは政治犯の監獄として使われていた。王族や貴族でここで死んだ人は少なくない。

グロスター　丸禿の坊主め、おれに閉出しを食わせろというのか。
ウィンチェスター　そのとおりだ、お前など、国王と祖国を守る摂政とは名ばかり、
実はひそかに殺生をたくらむ裏切者ではないか。
グロスター　そこをどけ、きさまの陰謀は明らかだ。
きさまが先王の殺害をたくらんだことはな。
きさまなど、娼婦[1]の罪をお許しあそばしている手合いだ。
この調子で勝手な口を利いていると、
その馬鹿でかい枢機卿の帽子に包んで、たたみこんでしまうぞ。
ウィンチェスター　何を、きさまこそどけ。こちらは一歩も動かぬぞ。
どうしてもというなら、この場は第二のダマスカス、
きさまは兄のアベルを殺したカインとなって地獄行きだ。
グロスター　きさまなど殺す気はない、このまま追い返してやる。
それ、その緋の衣にきさまを包んで、
洗礼に連れて行く赤ん坊みたいに、この界隈から追い出してやるのだ。
ウィンチェスター　やれるならやってみろ、まともに受けてやる。
グロスター　何と！　このおれがそんなおどし文句をまともに聞くと思うのか。
皆の者、刀を抜け、国王の領地のためだ――
茶色の服の専横は我ら青服が受けて立とう。おい坊主、ひげに用心しろ、
そいつを引っ張って、横面にしたたかお見舞いするぞ。
きさまの帽子など、この足で踏みつけるのだ。
法王も教会のお歴々もかまうものか、
この頬げたをつかんで、きさまを引きまわしてやる。
ウィンチェスター　グロスター、この決着、法王様の前でつけてもらうぞ。
グロスター　そら、這々の態で逃げろ、股のはれものに気をつけてな！
さあ、やつらを叩き出せ、なぜほうっておくのだ。
出て行け、きさまの相手はおれがする、羊の皮をかぶった狼め。
失せろ、緋の衣の偽善者も、茶の服の部下どもも！

グロスターの部下たちは枢機卿の部下たちに打ちかかる。乱闘の最中に、ロンドン市長が部下の役人たちを連れて登場する。

市長　何たることです！　お二人とも、国家の枢機を司る身でありながら、
こうして悪口雑言をこととし、治安を乱されるとは！
グロスター　治安と言われるか！　わしに何のとががあるというのだ。
このボーフォートが、神をも国王をもないがしろにし、
塔を占拠して勝手な振舞いをしているのだ。
ウィンチェスター　このグロスターこそ、市民の敵、
たえず戦をすすめ、和平をさげすみ、
市当局の寛大さにつけ入って巨額の賦課金をとり立てている。
しかし教会の権威をくつがえそうという気は十分、
というのも、みずからが国家の摂政であるのをよいことに、
このロンドン塔から武器を持ち出し、
みずから王となって現在の王を斥けるつもりでいるのだからな。
グロスター　その答えには言葉は無用、腕がものを言うぞ。

彼らは再び争う。

市長　また決闘騒ぎか、このうえは
正式に布告を下すほかない。
おい、できるだけ大声でな。〔叫ぶ〕
役人　本日ここに神と国王との平安をもかえりみず、武装して集った者に対して国王の名において命令する、いかなる者であれ、それぞれの住居に戻ること、かつ今後、武器刀剣の類は一切これを携帯ないし使用せざること、命令にそむく者は死刑に処する。
グロスター　枢機卿、法は守らねばならぬ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com